シヤマン教より見たる朝鮮の巫子

鳥居龍藏

朝鮮の巫覡のことに就ては既に神道談話會でお話致したこともあり、又其筆記は大正二年十一月の『東亞之光』第八號第十一號に『朝鮮の巫覡に就て』と云ふ題で掲載してありますから、それと重複したことは省きまして、是から申上げますのはシャーマニズムの上から見たる朝鮮の巫覡に就てお話して見たいと思ひます。

朝鮮と日本との關係は、色々の學問の上から見て頗る興味ある問題でありまして、今晩お話致すことも或は原始神道の上に、或は日本の古代の神話の上に多少關係があらうと思ひます。即ち韓國の內容の一端は少くとも此話の中に現はれると思ふのであります。

先づ一般の神話や、比較宗教や、人種學などの上から申しますと、シャーマニズムと云ふ宗教は、御承知の如くスピリットが彼方此方にあるのを祈禱したり、或は人が病氣に罹るのは靈魂が身體の中に入つて禍をなすのである。靈魂は天地到る處に充ち滿ちて居る、其靈魂に觸れると病氣になつたり、或は饑饉が起つたり色々の災厄が生ずる。其靈魂の中には幸魂と荒身魂と云ふやうなものがあつて、それが人に害を與へ、或は色々の災厄を起す。其靈魂と人との間に立つて居るのが巫覡でありまして、巫覡が或る儀式を

して、靈魂を腹の中から取出せば其人の病氣が治り、又靈魂のお怒りになつて居るのを宥めれば、饑饉が豐年になり、天下泰平國家豐饒、人々も安泰になると云ふのであります。

御承知の如くシャーマニズム Shamanism と云ふのは極くプリミチーヴの宗教でありますが、朝鮮の宗教と云ふものは要するにそれなのです。或人は朝鮮の宗教は佛教だとか儒教だとか言ひますが、それは上流社會の人のことで、一般の人はシャーマニズムを信じて居るのであります。佛教は百濟とか新羅とか高勾麗とか云ふ時に傳はつたもので、儒教は後に行はれまして、所謂外來の宗教であります。

シャーマニズムの行はれて居る區域は、西比利亞、滿洲、中央亞細亞等に及んで居りますが、專ら亞細亞の東方及び北方に行はれて居る一の宗教であります。さうしてそれには必ず巫覡がある。巫覡が神に祈禱をし、幣を捧げ、或は七五三繩を張り、それから太鼓を敲くと云ふやうな風が行はれて居るのであります。それで今日行はれて居るシャーマンは、大體之を二種に區別して見ることが出來ます。一はProfessional shaman 今一つは Family shaman であります。プロフェッショナル シャーマンは既に男の巫と女の巫とが出來て、專門的になつて居るのでありまして、ファミリー シャーマンは、一家内に於て祈禱をやつて居るのでありまして、此二種が行はれて居ります。

そこで朝鮮のシャーマンはどうかと申しますと、既に立派な職業になつて居りますが、之に從事して居る者は極めて社會上賤しめられて居ります。朝鮮には八賤と言つて、八種の賤しい階級がある。一番下の

を白丁と言つて、巫覡は其少し上の階級に位して居る位のものであります。けれども民間の信仰は非常に盛んでありまして、到る處に行はれて居ります。今日に於て其位でありますから、昔に於ては隨分勢力のあつたものであらうと思はれます。私は彼等はプロフェッショナル シャーマンに屬するものと思ひます、彼の滿洲、西比利亞、中央亞細亞等に行はれて居るのは之に屬するものと言つて差支ないのであります。是はシャーマンの階級から申しますと、非常に進んで居る方のものであります。それからファミリー シャーマンの方は、是はまだ極めて原始的のものでありまして、之が專ら行はれて居りますのは東薩加半島及び其北でありまして、コリヤーグ、チユクチ、エスキモー等と云ふやうな、白令海峽に寄つた方の亞細亞民族の間でありまして、どう云ふ風にやつて居るかと申しますと、是は一の有名なるものでありますが、白令海峽の所にチユクチと云ふ人間がある。それはまだ石器を使つて居ると云ふ位の原始的狀態にある種族でありますが、其の狀態が面白い。此種族には祈禱をしたり儀式をしたりする專門の巫覡と云ふものはありませぬで、皆家族的にやつて居るのである。例へば妻が太鼓を敲き、祈禱をすると、夫は獻げ物の仕事をするとか、色々の用をして居るのでありまして、總て家内でやつて居る。プロフェッショナル シャーマンは、滿洲、西比利亞、中央亞細亞等に行はるゝもので、卽ちウラルアルタイ民族の地方に行はれて居りまして、朝鮮も無論此中に屬する。此等の氏族では最初は、ファミリー シャーマンの時代がありましたでしやうが、這はもう古い昔に過去つたのであります。

そこでファミリー シャーマンからプロフェッショナル シャーマンになるにはどうして發達するのかと申しますと、最初は家々でやつて居つたのが、同族が多くなつて來ると、卽ち社會組織が段々發達して來ると祝詞を讀むことも六ケしくなり、又儀式も段々規模が大きくなると云ふやうなことから、一家内の者では出來なくなるから、そこで專門のシャーマンと云ふものになる。であるから古い時代の家族的になつて居つた時には巫覡と云ふものは無かつた。家内に於て神事を行つて居つた。是が第一に注意すべき點である。それからシャーマンに無くてならないものは太鼓である。是は必ず必要なるもので、どのシャーマンでも有つて居る。日本の太古にも太鼓が有つたか無かつたか、さう云ふことは確かには存じませぬが、神樂太鼓と云ふものと比較すると、其間に何等かの關係があるやうに思はれるのであります。是が滿洲のシャーマンの太鼓です（實物供覽）

それから次に注意すべきことは神に仕へる者は男であるか女であるかと云ふことでありまして、是は一寸問題です。玆に神と申すは God ではなく Spirit の意味です。卽ち靈魂です。此 Spirit に仕へる所の職業をして居るのは女であるか男であるか。所で此巫覡と云ふのは、巫は Female で、覡 Male でありますが、朝鮮の方から申しますと、朝鮮の巫は殆と女ばかりでありまして、男は餘りありませぬ。唯だ咸鏡道の北靑と云ふ所がありますが、北靑以北豆滿江流域のシャーマンは男が多く、女も其中に混つて居りますが、それは南方から移住して來た者でありまして、元から居つたのは男の巫と云ふ方です。之に反して

他の朝鮮各道に於ては悉く女であります。そこで此靈魂に仕へる所の者は男であつたか女であつたかと云ふに原始的の者は女であります。其事はシャーマンの研究をして居る有名なるオーソリチーも多くさう云ふ説を採つて居ります。尙一つの例を以て申しますと、亞細亞の東方白令海峽に寄つた方に居るチユクチと云ふ種族があります。それは今申しましたファミリー シャーマンに屬するのでありますから、一家内の者は男女共に靈魂に仕へるのでありますが、併し男よりも女の方が威力ある者として居る。それでありますから男は儀式の用を足す位の話で、神の靈が憑移るとか、病氣を治すとか、禁厭をするとか、太鼓を敲くとか云ふことは皆女がして居る。それでありますから女の方が勢力がある。日本に於ても古くは神事に就ては女子が常に優れた地位を占めて居つた樣であります。所が女子が優れた地位を占めて居ると申しましても、それは處女に限るのでありまして、子供が生れますと其力は失はれる。要するに子供を生んだことのない女が清淨潔白であると云ふことになつて居るのであります。日本の巫子も能くさう云ふ所から考へて見まするとと、幾らか之に似て居りはせぬかと思ふ。神道の研究に就ても、從來は後に出來た註釋書の研究が段々盛にありますが、私は斯ふ云ふ原始時代の立脚點から研究すると云ふことも必要ではあるまいかと思ふのであります。

兎に角さう云ふ風に極く原始的の、開けないシャーマンに於ては、神に最も接近し、力のあつたのは女であつた。所が段々進んで來るに從つて男がやるやうになつて來た。Change of sex 男が女に變化するや

うになつて來た。初めは女が主であつたが、世の中が進むと共に次第に男に移つて、反對に女の方が附隨するやうになつて來た。是は現に今日西比利亞地方で行はれて居る所を見てもさうである。この間には面白ひ風習が行はれて居ります。所が朝鮮に於てはどうかと申しますと、此點に於てはまだ古い形式が行はれて居つて、女が勢力を有し、男は神に仕へる上に於ては全く勢力がない、是は餘程注意すべき點である。

此女の勢力が男に移つたと云ふことは、前に申した家族的のシャーマンが、世の中の進歩と共に段々專門的になり、そうして儀式も六ケしくなり、祝詞の如きも女の力では不十分であると云ふやうになつた所から、男に移つて來たのであらうと思ひます。其證據となるべき例も澤山ありますが、其一例は西比利亞、滿洲等に行はれて居るシャーマンが其れであります。さう云ふ方面では女のシャーマンと云ふ言葉は皆一樣であるに反して、男のシャーマンと云ふ言葉は皆違つて居る。それに依つて見ても女の方が先きで男の方が後であつたと云ふことが分る、のみならず昔は女が神に仕へて居つたと云ふことが明である。此點に於て朝鮮のシャーマンは古い形式の上に立つて居ると言つて宜いと思ひます。

そこで朝鮮の巫子は、どう云ふやうにして後代に傳へて行くかと申しますと、朝鮮では母が娘に傳へる、けれども若し娘が無い時には他の者に傳へる。それから又中年から巫子になることも出來る。中年から巫子になるにはどう云ふ風にするのかと申しますと、多くは大病に罹つて、それが治つた場合に、どうし

ても自分は靈魂に仕へなければならぬと云ふやうな心を起してなるものもあり、或は偶然自分がインスピレーションに感じたと云ふやうな考から巫子になる者もある。さう云ふのは最初は師を選んで、弟子となつて彼方此方に隨つて行き見習をするのであります。又巫女は結婚しても差支ないと云ふことになつて居る、此點は又朝鮮の巫女も古い形式を失つて居るのであります。そうしてどう云ふやうにして其の事を行つて居るかと云ふと、京城の南山、或は鷺梁津などに居る有力なる者は、一定の場所または自分の家に祈禱する場所を拵へて人の參詣を待ち、祈禱を請ふ者があれば其處で祈禱なり禁厭をして居りますが、其他の地方に於ては通常の家も巫子の家も變りがありませぬ。さうして多くは出張して病人に接する或は祈禱をすると云ふことになつて居ります。

それから又朝鮮に於て專門の巫子となるのには、一の面白い風習がある。是は咸鏡南道の永興と云ふ所で調べた例でありますが、永興の方では、巫子になるのには山の中に行つて鏡を發見して來なければならぬ。巫子となるには鏡を有つて居なければならぬ、鏡を有たなければ巫子としての資格がない。故に巫子になるには一週間も十日も山を搜して鏡を發見して來なければならぬ。現今では必しも其通り行はれて居らないやうですが、さうしてなるのが本式である。其鏡と云ふのは是れであります（實物供覽）是は同地の警察署で沒收したのを大學に寄附されたのであります。巫子が鏡を有つて居ると云ふことは、獨り朝鮮ばかりでなく、蒙古のシャーマンも同樣であります。蒙古に於ては今日喇嘛の佛教が盛んでありますけ

れども、興安嶺の中や其他にはまだ喇嘛の入らぬ以前のシャーマンがある、それも朝鮮の巫子と同樣に鏡を有つて居る。此鏡は非常に威力のあるもので、惡魔を拂ひ、惡い靈魂を退けると云ふので、一の神體になつて居る。日本の神體にも鏡になつて居るのが澤山ありますが、シャーマンを信ずる所では鏡を非常に威力あるものとして居る。朝鮮の巫子も其一例でありまして、鏡は是非無ければならぬものとなつて居ります。其外シャーマンに必要なものは太鼓である。尤も朝鮮のシャーマンには左程値打のあるものとはなつて居りませぬけれども、滿洲其他亞細亞の東北のウラルアルタイ民族の間には太鼓に對する信仰が盛でありまして、シャーマンには太鼓が必要なものとなつて居ります。太鼓の音は善良なるスピリットは喜ぶけれども、惡い神は非常に之を恐れると云ふので、極めて神聖のものになつて居ります。それから今一つは鈴であります。此鈴も朝鮮の巫子に必要なるものとなつて居りまして、鈴はシャーマンの一のシムボルと言つても宜い位である。鈴の音は惡魔が最も嫌ふ所のものであるから、祈禱をする時には必ず鈴を振るのであります。日本の巫子も同樣に鈴を持つて居ります。而してこの鈴は日本の其れと同一の形狀であります。尤も日本に於ては最早や其意義を失つて、何の爲に持つて居るのか分らぬと云ふ位になつて居りますけれども、朝鮮のシャーマンに於てはまだ鈴が非常の威力あるものとなつて居る。日本で式三番叟に鈴を振るのは。やはり惡魔を拂ふと云ふ意味であらうと思ひます。兎に角日本の巫子が鈴を持つて居ると云ふことも、シャーマンに關係ある大切なる點であると思ひます。

それから朝鮮では巫覡のことを何と言ふかと申しますれば、무당（ムータン）と言ひ、或は單に무（ムー）と言ひまして、漢字では舞黨と書いてあります、併し是は要するに當字でありまして、單に音を現はしたに過ぎませぬ。一體今も申しました通りウラルアルタイ民族に於ては、女のシャーマンと云ふ言葉は皆一定して居りまして、殆ど共通であると言つても宜いのであります、之に就て露西亞の人種學者ツロシュチャンスキー（Troshchanski）と云ふ人が斯ふ云ふことを書いて居ります、卽ち蒙古人、貝加爾に居るブリヤーツ、ヤクーツ、アルタイ地方に居るアルタイ族、中央亞細亞に居るキルギース、是等の民族は女の巫子を何と言つて居るかと言へば、Utagan, Udagan, Ubakhan, Utygan, Utügan, iduan, duana と云ひ、またタルタルでは üdegc ツングスでは Utakan と云ふやうに皆殆ど同樣である。斯くウラルアルタイ民族の間に女の巫子と云ふ言葉が一致して居るのは、必ず一のオリジンから起つたものでなければならぬと申して居りますが、是は尤もの意見であると思ひます。もし、又朝鮮のムータン（Mutan）と云ふのも。やはりウタガン、ウダガン、ウバカンと云ふのから轉訛したものであると私は考へて居ります。尤もそれは私だけの考でありますから、若し誤つて居るならば後で御批評を願ひます。此點から見ても朝鮮の巫子は、あの方面のシャーマンと關係があると見なければなりませぬ。唯々蒙古語では少し違つて居ります。蒙古語では是は男女を通じてでありますがシャーマンのことを Buge と言つて居る。但し蒙古語には文語と口語とありまして、Buge と云ふのは文語で、口語では Bo と言つて居ります。此ボーと云

ふのは朝鮮のムー（Mu）と同じやうな發音でありまして、斯う云ふ所から見ると、是も餘程似通つて居るやうに思はれます。一體朝鮮の言葉はツングースや蒙古語と同じ系統の言葉でありまして、それは巫子の上に遺憾なく認められます。

シャーマンは滿洲語では Saman（薩滿）ツングース語では Samman, Hamman ヤクーツ語 öiun タタル語 Kam キルギーズ語 Baksa（Baksa），サモエード語 Tadibeg であります。

それから朝鮮の女の巫子にはお經と云ふものはない、口から口に傳へられるのでありますが、咸鏡北道に於ける男の覡には一種の祝詞のやうな書物がある。其中には支那の五行說の思想なども加はつて居りまして、餘程進んだものであります。然らば女の巫子の勤めはどう云ふことをするのかと申しますと、先づ祈禱をする。祈禱にも色々ありますが、例へば人が病氣になると、其病人の所へ行つて祓をする。或は旱魃とか云ふやうなことがあると、それは惡い靈魂の爲であると云ふ所から、其靈魂を和ぐる爲の祈禱をする。或は船の祈もすれば、森、池、山、丘其他總てのものに就ての祈をするのであります。それから其組は、京城附近のは一組でも隨分大勢居りますが、其他は大抵三人で一組となつて居ります。一人が本當のムータンで、一人は太鼓を敲く役を勤め、今一人は鐃鉢を鳴らすのであります。一體朝鮮人の宗教は何かと申しますと、佛教も行はれて居ります、又儒教も行はれて居りますけれども、それは上流の一部に行はれて居るのみでありまして、大部分はシャーマニズムである。若し一般の民衆の宗教思想を儒教であると

云ふやふに思つたら大變の間違である、佛敎であると云ふやうに思つても大間違である。成程儒敎も佛敎も行はれては居りますけれども、それは古い民族性の上に着色せられたる思想に過ぎないのであつて、根本的の思想はやはりシャーマニズムであります。シャーマンの思想がどれだけ朝鮮人の頭を支配して居るかと申しますと、山とか、河とか、海とか、森とか、丘とか、木とか云ふやうな天然物は勿論のこと、其外家の中、天井、竈、煙突、井戸、路傍、到る處、有らゆる物にスピリットが充滿して居る。それであるから船に乘つても、山に行つても危險であると考へて居る。人が病氣になるのは其スピリットの荒身魂が身體の內に入るからである。又其人の運が惡く、色々の災難が來ると云ふやうなことも、やはり惡い靈魂の憑いた爲めである、故に其惡い靈魂に憑かれないやうにしなければならぬと云ふのである。此精神は日本にもありまして、日本では雪隱の中に惡い靈魂があると考へ、今でもやる人があるやうですが、雪隱へ入る時には咳拂をしてからでないと入らぬと云ふやうなことがあります。さう云ふやうに朝鮮人は到る處にスピリットが充滿して居るから、之に觸れないやうに用心しなければならぬと云ふので、例へば旅行をして峠でも越えると云ふ時には、峠の頂上に小さなお宮があつて、其お宮の木に自分の持つて居るものを掛けて通る。それだから旅行する時には豫め布の小切のやうなもの、或は麻を用意して居つて、それを懸けて通ると云ふ風習がある。日本に於ても極く古い時代には旅行の平安を祈る爲め、或は峠を越える時には無事峠がに越えられるやうにと云ふので幣帛を奉つて手向をしたと云ふやうなことは萬葉集な

どにも見えて居ります。さう云ふやうに旅行の平安を祈ると云ふやうなことは現に朝鮮には行はれて居ります。

それから朝鮮の村の入口には必ず石が積んである、是は何の爲めかと申しますと、村の安全の爲に祈禱をする場所である。又木に七五三縄を張つてあるのがありますが、それは其木に神が宿つて居ると云ふ徴である。神の宿つて居る場所は、今日の朝鮮人の信じて居るのは主として森の中である、山ならば森林の中に神が鎮まつて居ると信じて居る。是は日本でも同樣でありまして、萬葉集などにも、杜と云ふ字を神の社と云ふ意味に用ゐて居ります。朝鮮でもやはり原始的で森を崇拜して居る。それが段々發達して來ると、森の中に小さな祠を建て、尚一段發達して來ると殿堂になる。其發達の順序が日本でも同樣でありまして、大和の大御輪か、或は信濃の諏訪などは山其ものを神體とし、殿堂は拜殿である。其今一段發達したのが神殿を備へるやうになるのであります。

それで七五三縄を張ると云ふことが、神の鎮坐して居る場所であると云ふ一の條件になつて居る。又其七五三縄の綯ひ方も日本のと同樣に左綯ひで、それに藁を下げる、或は紙を下げる或は麻を下げることもある。さうして其七五三縄を神の居ると云ふ所に張ると、最早其處は神聖の場所となつて、不淨の者は入れないことになる。斯う云ふ風で七五三縄は日本では全く儀式的のものとなつて居りますが、朝鮮では生命あるものになつて居ります。それであるから一個人の家でも、子供が生れると其家に七五三縄を張る。

飾又其七五三としてゆずり葉とか、木炭とか海草などゝ云ふものを着ける。又祝をする時分には門に七五三繩を張る。さうすると門内は清められたことになつて、無暗に其中へは入れなくなる。其這入れない者の制限は第一産をした者、次は身體から血を流した者、其次は四つ足の動物を殺した者、死人の埋葬式に行つた者、病人に接した者、斯う云ふ者は七五三繩を張つた内には這入ることが出來ぬ、若しそれを犯せば罰が當る。今日我國に於て七五三繩を張ると云ふことは、正月とか祭の儀式として用ゐられて居るのでありますが、昔はやはりさう云ふ意味に用ゐられたものであらうと思ひます。斯う云ふ風の次第でありますから、朝鮮のシャーマンと日本の神道とは、何か一種の關係があらうと思はれるのでございます。

それで前にも申しましたやうに人が病氣になると云ふことは、何處かで惡い靈魂に憑かれて、それが腹の中に入つたのであるから、巫子に祈禱をして貰つて、靈魂を取去れば病氣が治ると云ふのであります。其祈禱の方法は、茲に寫眞がありますが（寫眞供覽）先づ病人の寢て居る所に神棚を設ける、神棚を設ける時分には其處に笹の葉に幣束を下げるとか、或は木の枝に木綿垂（ゆふしで）を下げて正面の神前に置く、さうして、色々な供物を獻げる。其時に巫子が中央に立ち、左右に太鼓を打つ者と鐃鉢を鳴らす者とが坐を占め、諸々（もろ〳〵）のスピリットを呼集めて祈禱をなし、腹の中に入つて色々の病を爲して居る靈魂の出て行くやうに祈る。さうしてそれを出すと云ふ儀式が餘程面白いのです。神前に供へてある笹に幣束を懸けてあるもの或は木の枝に木綿垂のあるもの、それに靈魂が移つて行くものと信じて居る。日本の神道にも「おはす」

と云ふ言葉がありますが、詰り禍津毘を幣束なり或は木の枝に負せて、それを一緒に持去れば其病人は治ると、斯う云ふやうに考へて居る。是は非常に迷信のやうでありますが、朝鮮人はさう云ふやうに考へて居るのであります。所がさう云ふ祈禱をしても、まだ病人が治らぬ、惡い靈魂が執念く憑いて居ると云ふ場合には、更に色々の方法を講ずるのであります。其有樣は玆に寫眞を持て參りましたから、之を御覽になると大體御分りになりませうが、一丈も二丈もある麻布を巫子の身體に絡き付け、其麻布に靈魂を負はせて、それを退けると云ふやうなこともやる。麻は非常に神聖なものとして、色々の神事に用ゐますが、其麻に惡い靈魂が移るものとして居る、日本の幣束に小さな麻布切れを附けるのも注意すべき事でしやう。それでも尙退かない時には、今度は巫子が劍を持て來て脅す。それも寫眞があります（寫眞供覽）。是は北靑で撮つた寫眞ですが、劍を振廻はして脅す、それでも出て行かぬ時には身體に傷を付けて血を見せることもあり、或は大きな分銅を齒で咬へて振つて歩くと云ふやうなこともする。それは詰り力强いと云ふ所を見せて、靈魂を脅すと云ふ爲めである。併し普通には鈴の音、太鼓の音で大抵の禍津毘は追拂ふことが出來ると信じて居るのであります。

斯樣に朝鮮の巫子と云ふものはスピリットと人間との間に立つて居るものである、其故に預言をする、例へば今年は饑饉が來るとか、疫病が流行するとか云ふやうなことを言ふ。其は靈魂が巫子に憑り移つて言はせるのであると信じて居る。であるから朝鮮の巫子は啻に靈魂を追拂ふのみならず、尙自分がスピリット

のインスピレーションに感じて色々なことを言ふ。或は死んだ人の靈魂が憑移ると云ふやうにも考へて居る。是は日本でも『記』『紀』に女子が神樣の宣托を受けて斯う云ふことを言つたとか、何處の神を祀つたならば病氣が平癒するとか云ふやうなことがありますが、日本の神道と朝鮮に於けるシャーマニズムとは色々な點に於て似た所がある。それは唯々偶然一致したのだと言へばそれ迄でありますが、どうも偶然とばかり見ることの出來ないことが色々ありますので、日本と韓國との間には何か深い關係があるではなからうかと思ふのであります。現に日本で神社の儀式なり、社會的の儀式となつて居るもので、朝鮮では生きて活動して居る所のものがあるのであります。

次に太鼓に就て申し上げますが、朝鮮の巫子の使ふ太鼓は、日本の舞樂の時に用ゆる羯鼓と同じ樣の形をしたもので、一方の手に桴を持て一方の手で打つ。さうして巫子は其太鼓の音に依て足拍子を取つて舞ふ、卽ち神樂です、恰度舞樂の時に太鼓に依て足拍子を取つて居るのと同じ樣であります。尙是は日本の神樂との間に於ても餘程面白いことがある。それは私が昨年の十一月「大阪每日新聞」に朝鮮の音樂のことに就て書いて置きましたから、今晩は申上げませぬが、朝鮮では太鼓を左程神聖のものとせずして、一種の樂器として使つて居るのであります。併ながら一般のシャーマンを見渡しますと、大變神聖なものとなつて居ります。是は滿洲シャーマンの太鼓でありますが、(實物供覽) 此太鼓はスピリットに對して非常に神聖のものとなつて居ります。日本でも神樂太鼓と言つて、神樂には必要のものとなつて居ります

が、今では單に樂器としての意味があるだけで、宗教上の意味は少しもありませぬ、けれども其初めに於ては宗教上の意味に於て缺くべからざるものとなつて居つたと思はれます。

太鼓のことに就てシャーマンのことを今少し申して見たいと思ひます。シャーマンに於ては太鼓に非常なる威力があるものと信じ、太鼓が無かつたならば殆どシャーマンの威力がない。太鼓の音が響くと、總てのスピリットが恐れるのである、又色々の靈魂を集める時にも太鼓が必要なるものとなつて居る。ファミリーシャーマンに於ては左程でありますが、專門的のプロフェッショナルシャーマンに於ては、是非共太鼓が必要なるもので、是れが無かつたならば巫子は出來ないと云ふ位になつて居ります。太鼓に就て之を人種學上から見まするとと、亞細亞の北と南とに於て二つの形式に分けて見ることが出來る。一はウラルアルタイ民族、卽ち滿洲人、ツングース、蒙古人、土耳古人と云ふやうな方面のもので、其方に於けるシャーマンの太鼓はこれです（實物供覽）裏面には中央に環があつて、それから皮の紐で張つてある。それからチユクチ、コリヤーク、エスキモーと云ふ方面のものになると、更に之に柄が附いて居る。恰度日蓮宗の團扇太鼓のやうな形になる。或は日蓮宗の太鼓も何かさう云ふ威力を示すやうな意味で出來たものではなからうか、何か是も日本の古い時代に斯う云ふタイプの太鼓があつたのであらうと思ひます。それから南方の太鼓は中央を打ちますが、北方の太鼓は下の方を打つ、幾らか斜にして下の方を打つのであります。それから此太鼓の上に鳴る物が附いて居ります。是も今では全く無意味になつて居りますが、それの發

達したのが鈴であります。日本や朝鮮に於ては既に鈴になつて居りますが、西伯利亞、滿洲、ツングース等の太鼓には上部に一種の鳴物が附いて居る。それが發達して鈴になつたのであらうと思ひます。

それから今一つ太鼓に就て注意すべきことは、プロフェッショナル シャーマン に於ては巫覡があつて、それが各自に太鼓を有つて居りますが、ファミリー シャーマンの時代であると、太鼓が家々に一つづゝあるのでなくして、村に一個しかない、例へばチュクチの如きはさうであつて、若し或る家で必要があると、其度に持て來て使ふ。其太鼓は非常の貴重なるものとし、太鼓の爲に家を建てゝ飾つて置く位のものである。又此等の人間は、冬は多く穴居し、夏になると移住するのでありますが、其移住する時分にはどうかと云ふと、太鼓を成べく小さくして持て歩く、さうして其太鼓は夏は爐の上に置くとか、冬は寢間に置くとか云ふやうになつて居ります。所がウラルアルタイの滿洲、ツングース、蒙古、エニセーから中央亞細亞、沙漠の方面のシャーマンは、既に專門的になつて居りますから、巫子は皆所有して居るのであります。けれども今も申しました通り朝鮮に來ると最早太鼓はそれ程の意味をなさない、殆ど理由が無くなつて居るのであります。

それから太鼓の名前でありますが、太鼓の名前が餘程面白い。太鼓はシャーマンの生活には最も必要であつて、殆ど生命の如くにして居りますが、其名前が大體同じ樣である。ヤクーツは太鼓のことを Tünür, Tünür, Dünür と云ふやうに呼んで居ります。それから滿洲語では Tunken 蒙古語では Düngür アルタイ

語では Tüngür と云ふふやうに皆一様である。斯う云ふ風でありますから其本は同一のものであらうと思ひます。更に日本ではどうかと申しますと古語は Tuzumi と言つて居ります太鼓(たいこ)は支那語です、多少似通つて居るやうに思はれます、朝鮮語ではどうかと申しますと、朝鮮では支那語の影響を受けまして蒙古語や滿洲語のやうに純粹のものではありませぬが 무다리 (Tutari) と申すのでありますから、此間にも多少の聯絡があるやうに考へられます。さう云ふやうに考へて見まするとと、朝鮮人とウラルアルタイ族との關係は單に宗教の上に於て認むるのみならず、體格の上に、或は言語の上に於て或は古い風俗習慣の上に於ても認められるのでありまして、朝鮮の巫子も要するに北方の西伯利亞、滿洲等に淵源して居るものと思ふのであります。餘り長くなりましては他の講演せらるゝ方のお妨げになると思ひますから、私のお話はこれで止めます(完)